

久保寺 生郎（くぼでら・いくろう）

1913年 大分県に生まれる

1937年 新興キネマ入社以来映画界で活躍

大映企画者を経て現在は勝プロダクション企画担当者

日本映画・テレビ製作者協会会員

座頭市物語 II

折れた杖

定価 五〇〇円

昭和四十七年十月十五日 初版発行

編著者 久保寺 生郎

発行者 増田 義彦

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(五六二)四三一―

振替 東京三二六番 千一〇四

関西支局 大阪市北区真砂町五三

TEL 〇六(三六三)一七〇六

制作 シバノプレス

印刷 廣済堂印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

座頭市物語 Ⅱ

折れた杖

子母澤

寛原案／久保寺生郎 編著



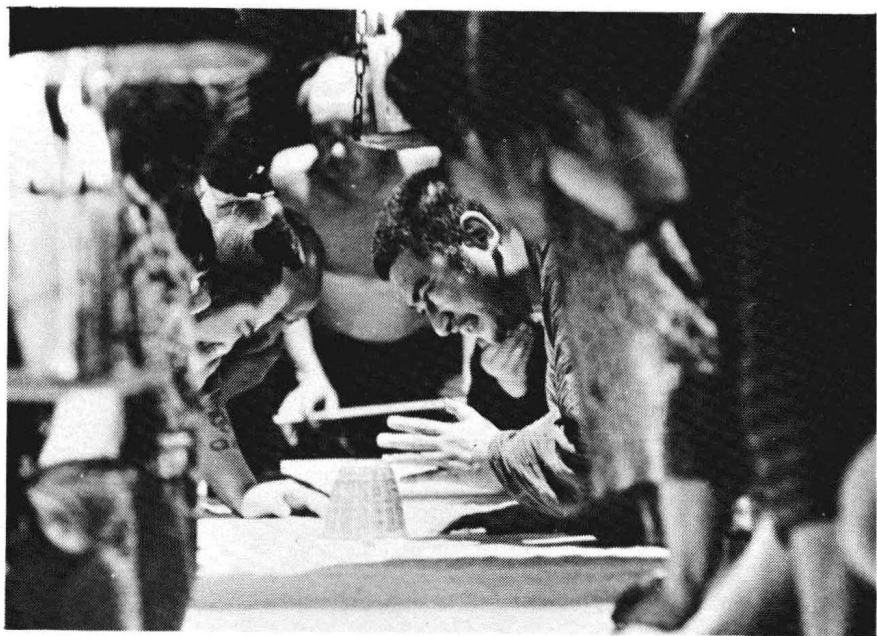
実業之日本社

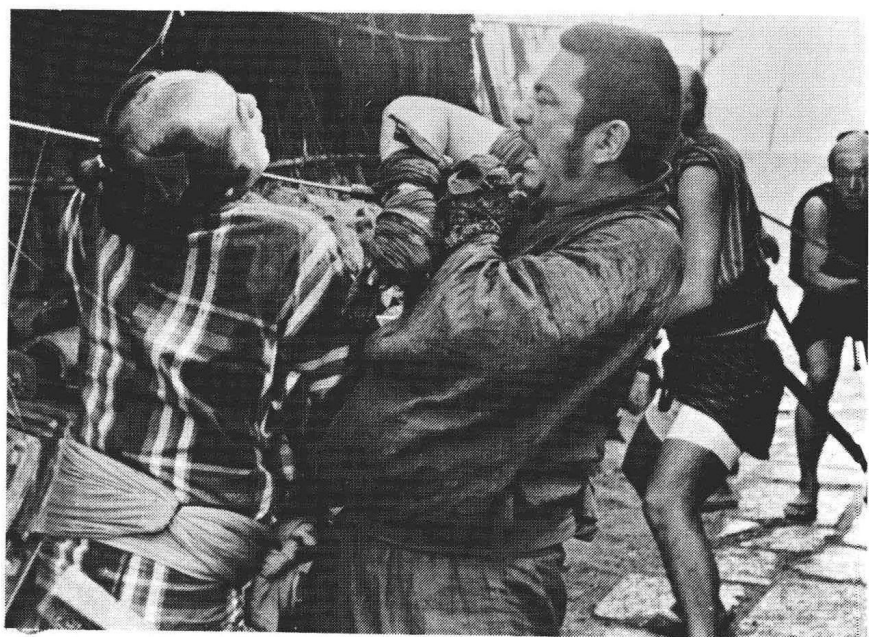
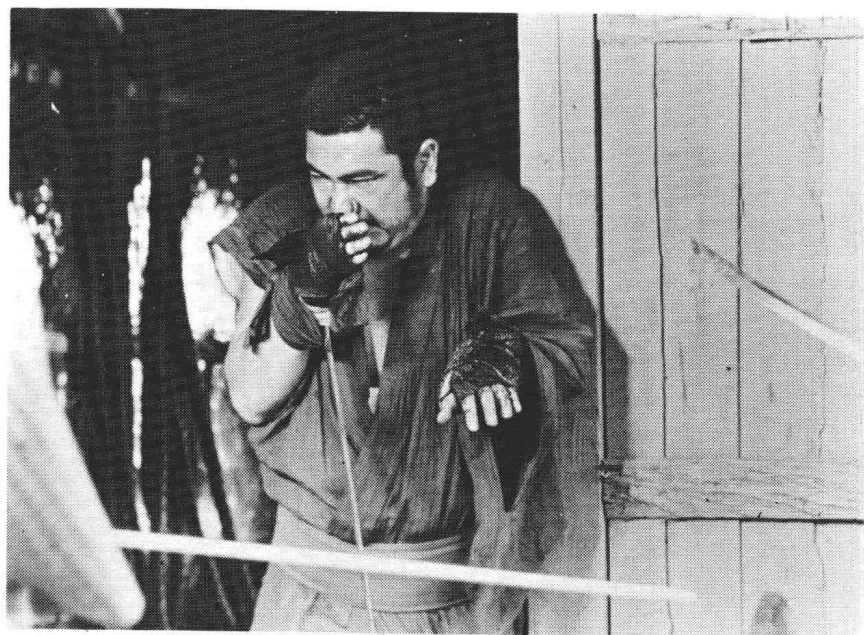


・勝 新太郎 製作・監督・主演映画

「新座頭市物語・折れた杖」名場面集

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com







座頭市物語 II

折れた杖

子母澤 寛
久保寺生郎 編著
原案

目次

座頭市 花会の血祭り…………… 11

座頭市 子連れ旅…………… 83

座頭市 折れた杖…………… 157

あとがき 犬塚 稔

装幀 橋本 治
協力 勝プロダクション

座頭市

花会の血祭り

星川清司 脚本
犬塚 稔 潤色
より
「兇状旅」

首にかかった大枚の賞金

暑い。

とにかく、暑い。

広野の草も木も、燃えるように熱く、手を触れると、パッと火でもつきそうだ。

長くつづいた草いきれの一本道を、きょうも一人旅行く座頭市の背にも、カッとまぶしい太陽が照りつけている。

市は、ふと、立止まり、腰に下げた汚い山道模様の手拭で、大きな坊主頭から顔、首筋、胸、腹へと、流れ出る汗をふくと、背中にくくりつけてある唐傘を日傘がわりにさして、ゆっくりと歩き出す。

白い一本道の彼方に、こんもりとした櫟林がある。

蟬しぐれが耳を聳するばかりの、その櫟林を抜けると、下仁田・馬山神社の鳥居前に出る。すると行手に、鎮守の森が迫り、祭太鼓の音がダーンと強烈に響いて来た。

上野国（群馬県）の南西部にある下仁田は、東は藤岡と館林に、西は信濃路に通じ、北に妙

義山、南に稻含山が聳え、清流西牧川と南牧川とが合流して鑄川となる小さな盆地にあり、葱ねぎと茹蕨こんじやくの名産地として知られている。

下仁田・馬山神社の境内は、年に一度の夏祭りに、ワーンと湧き返るような賑わいを見せていた。

参道にはためく奉納の幟のぼり、境内を埋め尽した近郷近在の人々、客を寄せている大道芸人、香具師たちの口上、その人波に揉まれて座頭市がやって来た。

境内の一角では、いま、奉納相撲がたけなわだった。

金十両に御神酒の角樽を添えた懸賞付の、飛入り五人抜き勝負が人気を集めて、土俵は熱気と喚声に溢れていた。

思い思いの鬚ひげ屑くずに熱狂の声援を送る群衆、それらの人々を掻き分け掻き分け、市が土俵際に潜り出て来た。

土俵上の熱戦を網膜の中に描きながら、ニッコリする座頭市。

「勝負あったッ」

「ざまア見ろ、残りは二人だ、あと二人で五人抜きだ」

「誰だ、次ぎア誰だ」

「ようし、俺が出る」

「鑄掛屋しっかり」

「ついでにやっちめえッ、鉄砲で行け、鉄砲で」

「はっけよい、はっけよい」

「押すんだ、押せ、押せッ、あッ、あ、バカヤロウ」

湧き上る熱狂の声に、市も次第に引込まれて肘を張り、拳を振り始めた。

「そら五人目だ、誰もいねえのか」

「いねえのか、いねえのか」

周囲からけしかける声に、たまりかねたように、首筋に風呂敷包みをくくりつけたまま土俵にかけ上った座頭市が、相手に背を向けて仕切りに入ろうとした。その珍妙な姿に、ドッと、観衆が湧いた。行司が慌てて駆け寄り、首筋の風呂敷包みを解き、褌をキリリッと締め直してやると、その背中をポンと叩いた。

「めくらか……」

「按摩だぜ」

その嘲笑や憫笑、苦笑に対して、ペロツと舌を出した市は、仕込を抜くときと同じように腰を沈めて、小耳を傾ける構えで、あらためて仕切りに入った。すでに四人を抜いた草相撲で、大関を張る荒船山が、この勝負もらったとばかり、ただ一度の仕切りで立上り、真一文字に押して行ったところを、按摩がツボを抑える恰好で、市に、スッとうまく両肘の関節を掴まれ、本来の力を出しきれぬまま、あッという間に土俵の外に出されていた。